

[前橋市周辺を訪ねて(前橋市)]見学レポート



金堂と塔(赤字)は確認されたもの



石製鴟尾、塔の中心礎石、塔心柱根巻石が残っている

この日枝神社が山王廃寺の比定地とされる





正面の上屋が山王塔跡で塔の中心礎石が置いてある







山王塔の建立時期は7世紀末の白鳳期の頃という

史跡 山王塔跡

大正一〇年塔心礎が発見され、
 ここが古い時期の寺院跡であるこ
 とがわかり、地名にちなんで「山
 王廃寺跡」と名づけられた。塔の
 心礎は一辺一四mの方形基壇の中
 央を掘り凹めた中に置かれ、東西
 三m、南北二・五m、厚さ一・五
 mという巨石を加工したものであ
 る。心礎のほぼ中央には、径六五
 cm、深さ一八cmの孔一柱受けが一
 と、さらにその中央に径二七cm、
 深さ三〇cmの舍利孔との二段の孔
 がうがたれていて、孔の周囲には
 径一〇八cmの環状の溝があり、そ
 こから放射状の溝が東西南北の方
 向をさして刻まれている。塔の心
 柱の太さは環状の溝内縁に合致す
 るものであるうか。寺院建立時期
 は、出土瓦などから七世紀末の白
 鳳期の頃と考えられる。

この上屋に石製鴟尾、塔心柱根巻石が置いてある

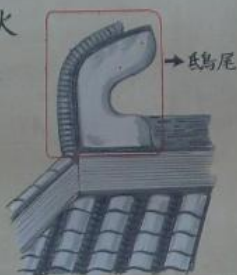


上屋正面の説明板

国認定旧重要美術品 **石製鵓尾**

所在地 前橋市総社町総社2408 日枝神社

鵓尾は、中国伝来の架空の動物で、火にあうと水を吹き雨を降らすとの伝説から、防火上のまじないとして、屋根の大棟の両端につけられるようになりました。鰐は、中世以降鵓尾から変化したものです。



有名な奈良県の唐招提寺金堂のものは陶製で、石製のは少く、山王廃寺のものと、鳥取

県伯耆大寺廃寺のものしかありません。

この鵓尾は角閃石安山岩製で高さ1m、重さ1tもあり、この鵓尾を大棟の両端に据えた、山王廃寺の建物の壮大さが想像されます。

国指定重要文化財 **上野国山王廃寺塔心柱根巻石一具**

指定年月日 昭和28年11月14日

所在地 前橋市総社町総社2408 日枝神社

根巻石は、唐風建築の基部に巻きつけ装飾としたもので、我国では大変めずらしいものです。

この根巻石は現在地から約100m東の地点で井戸枠に使用されてい



たもので、出土位置は不明です。根巻石
7葉の蓮弁は輝石安山岩製で、

径96.5cmの穴を有します。石材の加工技術は当時(7世紀後半)では高度なもので、宝塔山古墳、蛇穴山古墳の石室の加工技術との関連性が考えられています

石製鴟尾



塔心柱根卷石(重要文化財)



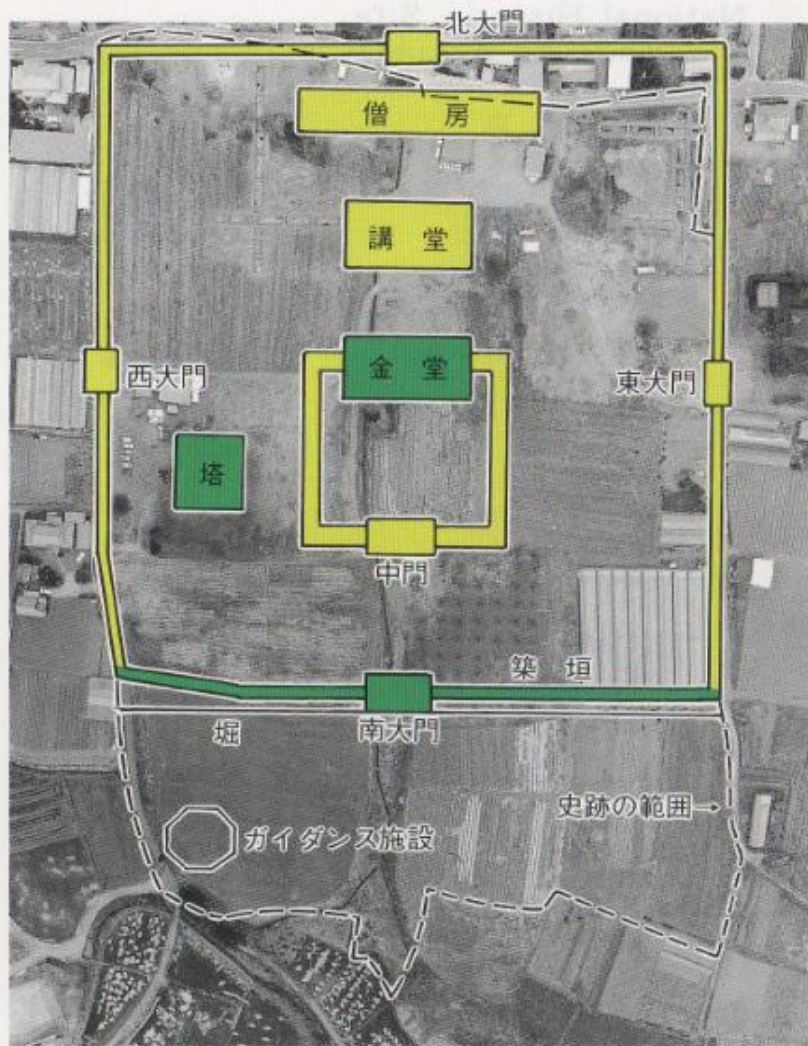
礎石等に使われたものなのか？



塔の中心礎石







上野国分寺の伽藍

■色は確認されたもの
 ■色は推定されるもの

国分寺が造られた頃

今からおよそ1250年前、平城京（奈良市）を中心に全国を約60の国に分けて治める律令政治が行われていました。

当時、災害や政治の乱れに苦しんだ聖武天皇は、仏教の力でこれを治めようと、国ごとに国分寺を造らせるとともに京には東大寺を建てました。こうした寺院は政府によって造られましたが、各地方の豪族や農民にも協力が求められました。

上野国の国分寺

上野国の国分寺は、政治の中心であり今の県庁にあたる国府の北西に、西に僧寺・東に尼寺が並ぶように建てられました。

歴史書によると、碓氷郡や勢多郡の豪族の協力により、750年頃に主な建物が完成したようです。国分寺全体の中でも、最も早い時期に姿が整ったものといえます。

僧寺は東西約220m・南北約235mの広さを持ち、周囲は築垣（土堀）で囲まれていました。その中央には本尊の釈迦像をまつる金堂と、高さが60.5mもある七重塔が建てられていました。

遺跡の発掘と整備

古い記録や調査のようすから、1000年頃には築垣や門は壊れていましたが、金堂などは残っていたことが分かります。しかし1380年頃には、それも滅びてしまったようです。その跡は道路などで分断されずによく残っており、大正15年(1926)に国の史跡に指定されました。



創建時期の上野国分寺(想像図)



発掘された南大門と築垣の跡〔東から〕
門の東半分の礎石や築垣の基礎が残っており、
周辺には多量の瓦が散らばっていました。

前方に見えるのは金堂の基壇(復元)



手前は調査隊の車





金堂の礎石(復元)





復元された金堂の基壇〔北西から〕

金堂の基礎の土壇を当時の姿に再現しました。
上面には36個の礎石そせき（柱の台石）が並んでいます。

右前方に見えるのは塔の基壇(復元)







塔の礎石(復元)





復元された塔の基壇〔北から〕

塔を支えていた基壇です。一辺19.2mの正方形で、
上面には17個の礎石そせきが並んでいます。

史跡表示



復元された築垣(ついがき)





昭^は和^く55年(1980)から行われた発掘調査^{はくつちようさ}の成果にもとづいて、同63年(1988)から遺跡を整備する工事が始まりました。これにより、
基壇^{きだん}や築垣^{ついがき}の一部が当時の姿に再現されました。

版築で復元された築垣

古代と同じく、
棒^{ぼう}でつき固めた土^{はんちく}
を積み上げる版築
で造りました。

東日本では初めての本格的な復元
です。1㎡あたり4
トンの重さがあり
ます。



史跡上野国分寺跡ガイダンス施設「上野国分寺館」





工藤圭章氏指導/設計・製作は大林組

こうずけ こくぶん じ しちじゅうのとう
上野国分寺七重塔 縮尺 1/20
 The Seven-storied Pagoda of Kokubun-ji in Kōzuke Province

奈良時代の天平13年(741)に、^{てんびょう}聖武天皇により国ごとに寺を建立することが命じられました。それによって造られた国分寺には、国の^{あんたい}安泰を祈るお経を納める七重塔が建てられました。各地域の人々の力を集めて完成したきらびやかで巨大な塔は、全国をまとめた政治の力と文化の高さの象徴でした。

上野国分寺跡にはこの塔の^{きだん}基壇や^{せせき}礎石が残っており、また発掘調査では多量の瓦や石材が発見されました。これらをもとに^{ほうりゅうじ やくしじ}法隆寺や^{とうしょうだいじ}薬師寺の塔、^{こんどう}唐招提寺の金堂など当時の建造物を参考にして、古代建築の権威である^{くどうよしあき}工藤圭章氏と考古学の大家である^{つばい きよたり}坪井清足氏の指導を得て、その姿を精密な模型で再現したものです。

七重塔のあらまし

基壇を含めた高さ	60.5m
建物の重さ	約1,050トン
使われた木材の量	1,850m ³
使われた瓦の数	約93,000枚
工事の期間	7～8年間

復元された七重塔の基壇 (設計・製作担当 株式会社大林組)

工藤圭章氏は大岡先生の教え子である



設計図が展示してある



上は創建当時(750年頃)の上野国分寺(僧寺)の想像図/下は300年位経った頃の国分僧寺の様子



上野国分寺(僧寺)の想像図
750年頃
上野国分寺(僧寺)の想像図
750年頃



300年位経った頃の国分僧寺の様子
300年位経った頃の国分僧寺の様子

伽藍復元模型

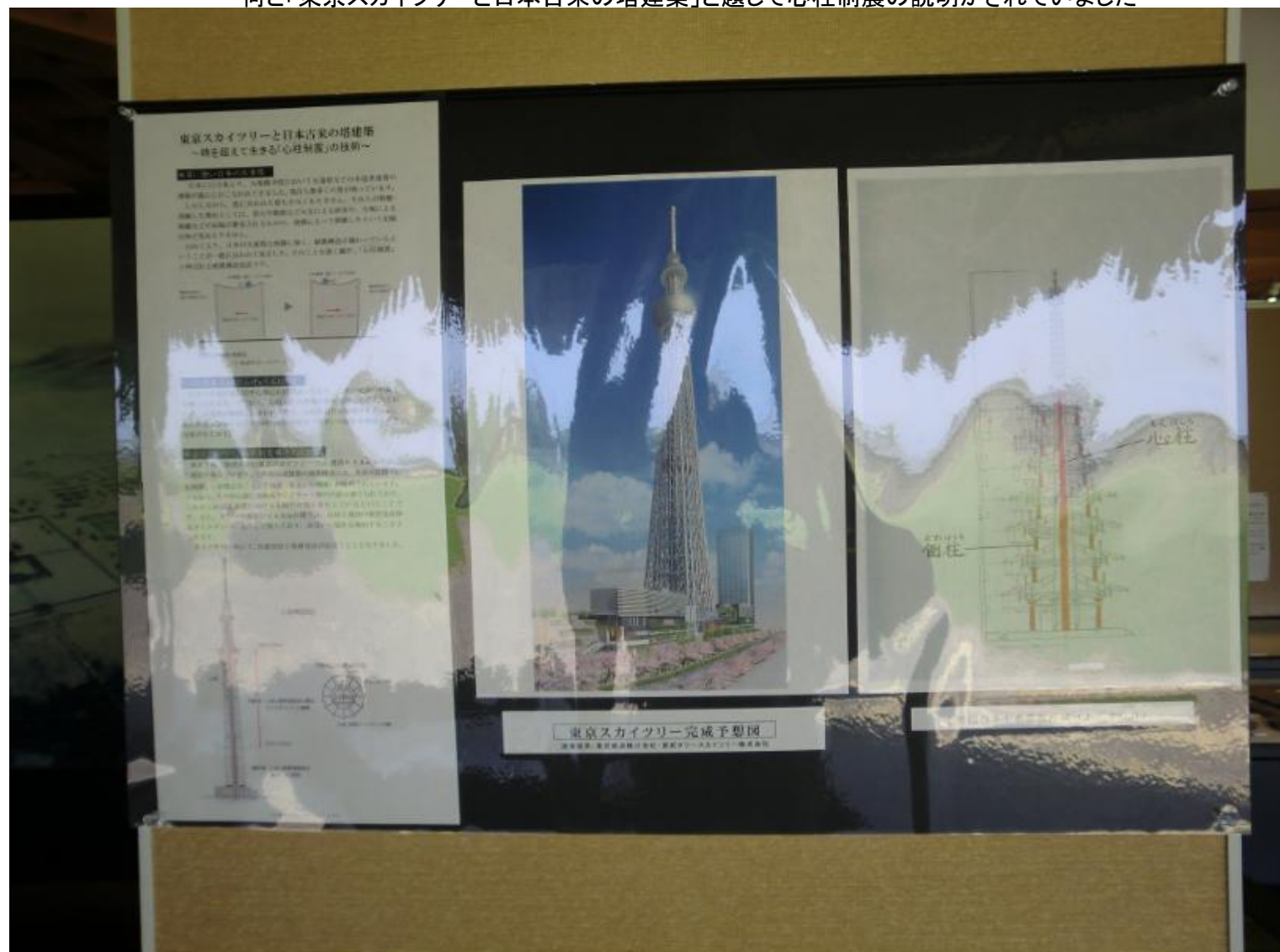


南大門復元模型



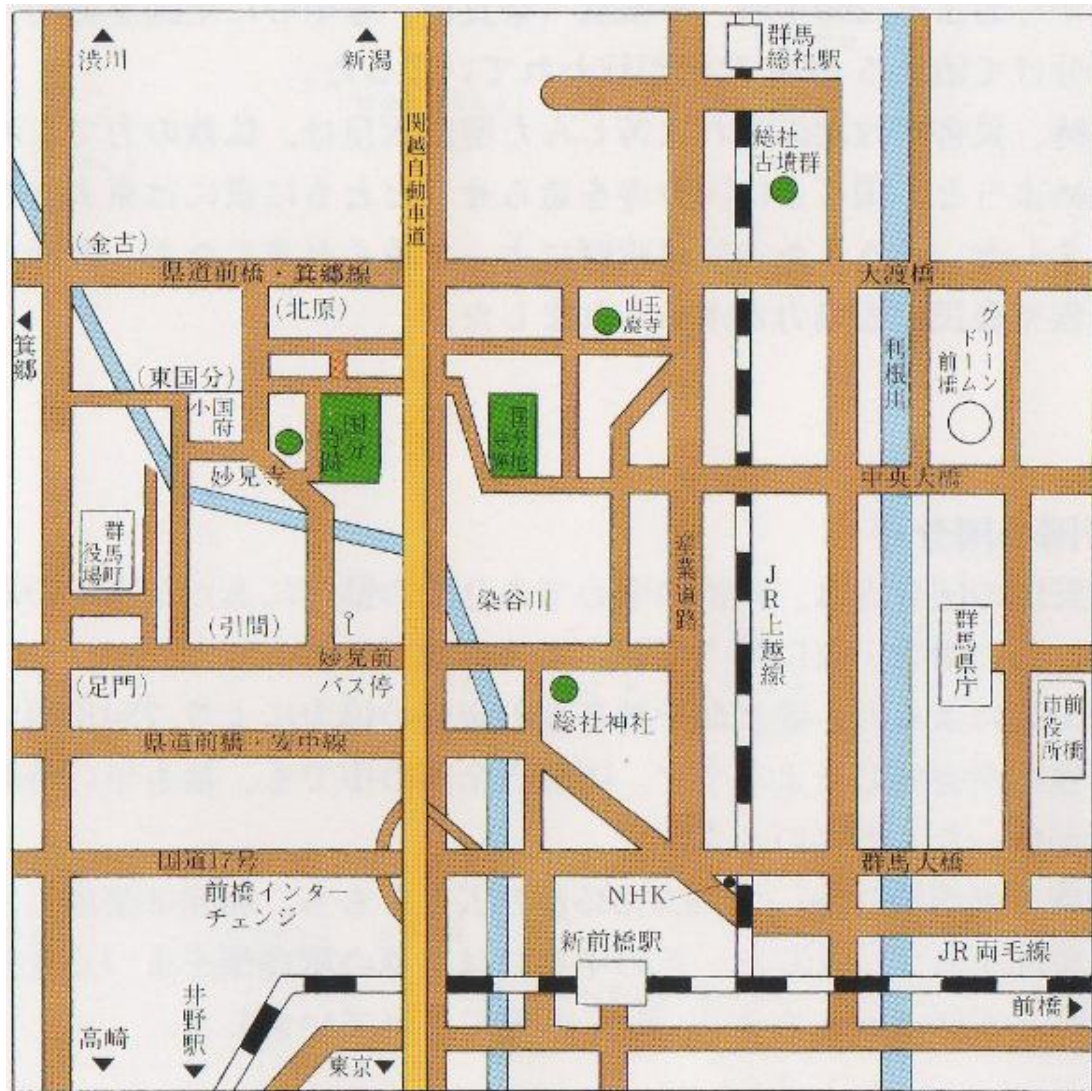
上野園分寺南大門復元模型 S = 1:30
東山園研究室 正徳藤二氏 寄贈
筑波工業大学工学部研究室 平成4年度製作

何と「東京スカイツリーと日本古来の塔建築」と題して心柱制震の説明がされていました



榛名山が遠望される





史跡上野国分寺跡のあらまし

奈良時代の天平13年(741)、聖武天皇は国ごとに僧寺と尼寺を造ることを命じました。これが国分寺で、後に僧寺が国分寺と言われるようになりました。

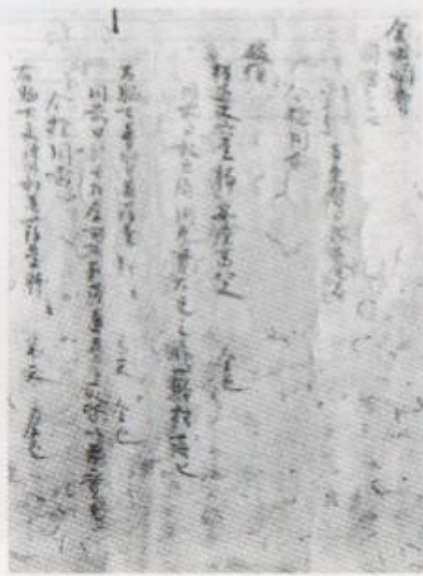
当時、群馬県は上野国と呼ばれており、その国分寺は今の群馬町と前橋市との境近くに建てられました。現在その跡では、遺跡を整備する工事が進められています。

上野国分寺の移り変わり

年代	主なできごと
538	○ 仏教が伝わる <small>ほうとうざんこふん</small> <small>じゃけつざんこふん</small> 宝塔山古墳・蛇穴山古墳が造られる <small>さんのおはいじ</small> 山王麿寺(放光寺)が建てられる <small>たいほうりつりょう</small>
701	○ 大宝律令が定められる
741	○ 国分寺を建てることが命じられる
749	・この頃、上野国分寺ができる
752	○ 東大寺が完成する
	・この頃、国分寺の修理が行われる <small>たいらのまさかど</small> <small>こくふ</small>
939	平将門が上野国府を占領する
1000	・この頃、南大門が壊れるなど衰退が進む
1108	・浅間山が噴火し、国分寺にも灰が積もる
1180	<small>あしかがとしつな</small> 足利俊綱が上野国府を攻める
1385	・金堂跡に墓地がつくられる
1400	・この頃、金堂の北側で土取りが行われる
1786	・紀行文に遺跡となったようすが書かれる
1887	・塔の礎石の上に石碑が建てられる
1980	・発掘調査が始まる
1988	・整備工事が始まる

古代の記録に見える 上野国分寺

1030年に作られた上野国についての記録の中に「金光明寺」(国分寺)が見えており、仏像が壊れていること、南大門が無くなっていることなどが書かれています。



ついでに近くの総社神社へ寄ってみました

一の鳥居





上野国総社神社略記

古代律令制下、国司は任国内の神社にて領幣したが、この神名を読み上げることから発し国司政治の衰退とともにその諸神の勧請とかわり国内の諸神を国府近くのか所に合祀し総社とした。平安時代末期の創建と考えられる。

上野国十四郡諸社五百四十九柱の神々を迎祀しやがてその神名帳一卷がご神体となった。

本殿は慶長年間（十七世紀はじめ）の造営であるが桃山時代の様式を残し、昭和三十八年に群馬県指定の重要文化財となり保護されている。拜殿は天保十四年（一八四三）に再建された豪華な建造物である。なお総社神社のご宝物文化財としては御神体である上野国神名帳をはじめ子持勾玉、神鏡雲版・天正十四丙戌二月一日銘、銅製円板弥勒座像の懸仏・天正十三年六月二日附、坪伯耆守の奉書した北条氏康の掟書・天正十八年五月附、前田筑前守利家、浅野弾正少弼浅野長政の禁制等が蔵されている。

上野国総社神社 社務所

奉納 江田町 富澤 正

平成二十二年十二月吉日改修

郷土の文化財を愛護しましょう

二の鳥居



手水舎



手水舎



御魂社



御魂社



鞭掛(むちかけ)が見える

神楽殿



神楽殿



市指定重要無形文化財 **総社神社太々神楽**

登録年 昭和48年(1973)4月
所在地 前橋市元総社町2-7-7 総社神社
管理者 総社神社太々神楽保存会

この神楽は、元総社町字屋敷の赤石家の祖先が、神道管領から伝承したものである。由来の年代は不明だが、元治元年(1864年)に書かれた「大神楽次第」という古文書が残っている。



戦前までは、赤石家だけで奉納してきたが、戦後は元総社町全体の青年有志によって、総社神社の祭礼日である3月15日に奉納されている。現在は16座だけを伝えているが、古くは38座舞ったというから、すばらしい里神楽であったことがうかがえる。市内には、この神楽の系統をひく神楽がいくつもある。

前橋市教育委員会

おはやしの 音色は未来へ ひびいてる

平成元年(1989)年度文化財愛護作品コンクール標語の部優秀賞

拝殿



参道が手前で振ってある



江戸時代末の再建



















本殿



江戸時代初めの建立て桃山時代の様式を残しているという



昭和62年に解体修理をしているという

流れ造りの屋根







宝塔



流れ造りの屋根

宝塔

応永四年と記されており

(約四百六十年位
まえのものなり)

昭和三十六年三月十四日社務所改築にあたり九十九社の東南二メートルの処に樹齡、六百年の欅木の根古より発見せり亦同時に板碑、応永四年卯年と記された巾一尺二寸縦三尺位のもの、他に縦一尺横六.七寸位の板碑六.七枚が出土せらる。

(文字は明らかではない)

神制四十周年記念 社務所

神輿庫か？

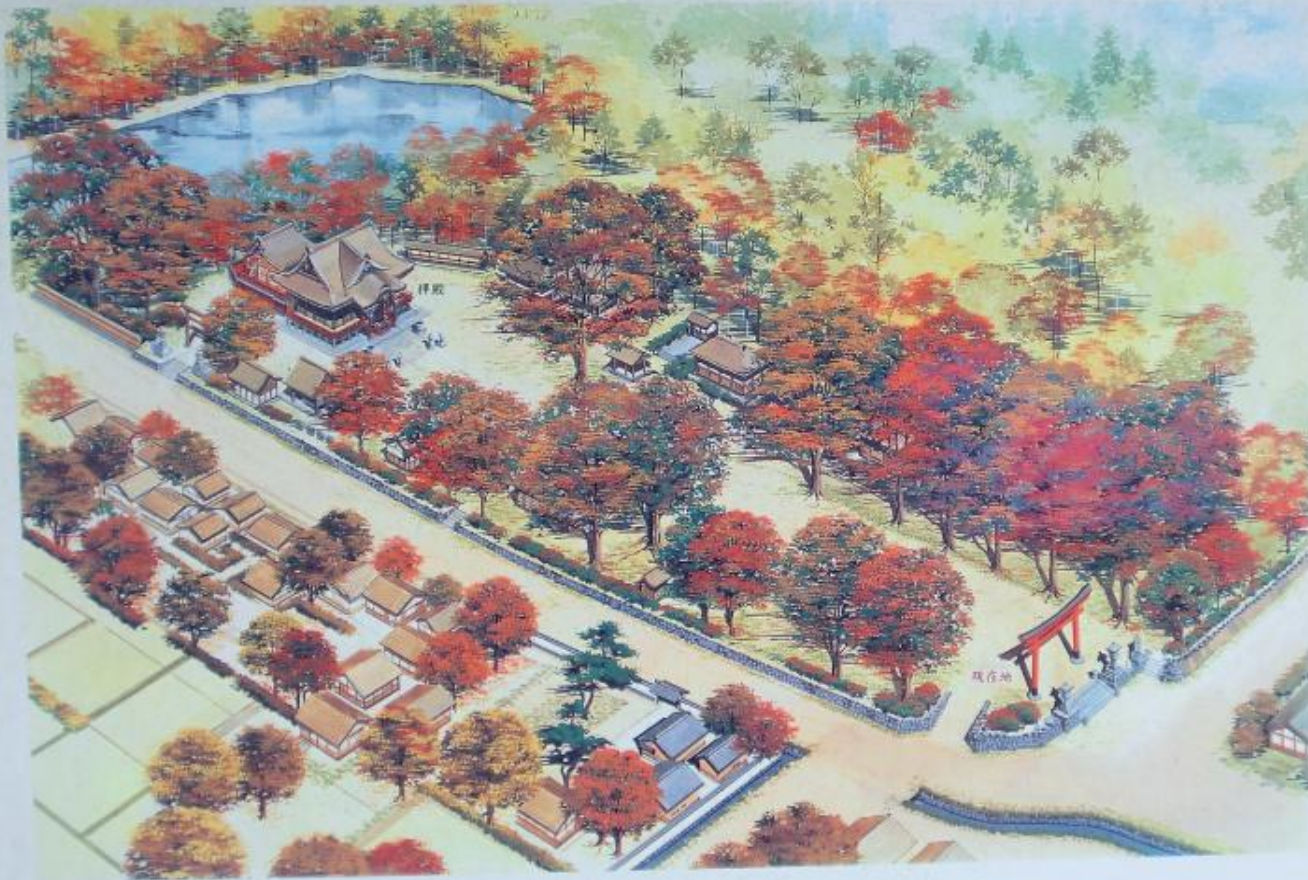


校倉造り風

齋館というと皇族の休憩場所となるが？



総社神社推定復原図



総社神社は、平安時代に、上野国司が国府内に上野国内の神社を合祀したことに始まる。
現在の本殿は江戸時代初期の桃山様式で、総社城主秋元氏により再建されたものである。
(昭和62年に解体修理。県指定重要文化財)

前橋市教育委員会
平成4年11月 設置

元総社町

総社町周辺の文化財



地図番号	文化財
1	上野総社神社本殿一棟 総社本上野国神名帳 総社神社雲版 総社神社懸仏 総社神社大々神楽
2	前橋城車橋門跡
3	笠簾師塔婆
4	蛇穴山古墳
5	宝塔山古墳
6	力田遺愛碑 光蔵寺葉匠門



	東覚寺層塔
7	(総社) 二子山古墳
8	石田玄圭の墓
9	山王塔跡
	山王庵寺塔心柱根巻石
	石製鷓尾残片一箇
	石製鷓尾一箇
10	上野国分寺跡

この蒼海城の城主に封ぜられた秋元長朝が総社神社の本殿を再建しているという





西

南

繪社神社 宮司 内田 門太夫 記

昭和五十六年 酉年 八月 十五日

水享元年長尾氏移ル即十祀元二千八百九十九年後花園天皇御即位ノ年也
 居ル下五十六年ニシテ石倉城ニ移ル

奉納 瀬下 善次郎

平成十三年八月吉日 建立

道
 堀水又ハ川
 橋
 堤防又ハ築山ハ築地高サ二丈余
 土俵ヲ築テ

粟島八日市場

開業鳥神社

齊城業師

橋々土俵堤

池ノ町

小野安御
 小野道風寺勅使ノ節

勅使橋
 稲ノ懸ケ橋ト云フ

家中屋敷

歌姫寺

伊ノ上
 塚田

屋敷
 磯岐

小野古跡

何レ土俵堤水陸溢程

花園業師
 鎌倉道

首洗池ト云

用水

四ノ橋

家中

外郭
 家中

弥勒寺

繪社大明神
 開

徳藏寺
 末寺

末寺
 末寺

大手

二ノ橋

家中

一ノ橋

一ノ橋

二ノ橋

三ノ橋

四ノ橋

家中

一ノ馬場

二ノ馬場

三ノ馬場

家中

天神

龍松寺
 鬼ヶ藤所

三石石倉

稲邊善寺

三石石倉

稲邊善寺

三石石倉

稲邊善寺

三石石倉

稲邊善寺

総社本上野国神名帳



県指定重要文化財 総社本上野国神名帳

- 1、指定年月日 昭和49年12月23日
- 1、所在地 前橋市元総社町1-31-45
- 1、所有者 (宗) 総社神社

【概要】

平安時代朝廷で行われていた儀式の中に全国の神をまつる四時祭があった。その際の記録が延喜式神名帳といわれるものである。

各国内でも国司が神社に参拝していたが、律令制の衰えと共に、国内の神社を一か所に合祀し総社神社とし、国司の国内諸社巡拝の煩わしさをなくした。その際の国内諸社の神名の記録を神名帳といった。

当総社神社に伝えられる神名帳は、総社大明神から始まり、鎮守10社、次に摂社549社を14郡別に記してある。その後、この神名帳は12世紀ごろには、神社の御神体として祀る様になった。現在の総社本は、1298年本を1557年に写し替えたものである。

弥勒菩薩
(表面)



普賢菩薩(表面)



普賢菩薩(裏面)



弥勒菩薩
(裏面)



県指定重要文化財 総社神社懸仏

- 1、指定年月日 昭和49年12月23日
- 1、所在地 前橋市元総社町1-31-45
- 1、所有者 (宗) 総社神社

【概要】

平安時代後期から本地垂迹説が生まれ、普及されていった。それにともない各神社には御神体(鏡など)に仏像を線刻したものが奉納されるようになった。さらにこれが発展すると、銅製円盤などに半肉彫の仏像を鑄出したものが神座に奉納されるようになった。これを御正体といい、柱などに懸けて拜むので懸仏とも言う。総社神社には二面所蔵されている。一つは径29cmの円盤形をした鉄製のもので、表に弥勒菩薩が半肉彫で鑄出されており、裏面に天正十四年(1586)の銘などが刻まれている。他の一つは、径9.4cmの青銅板に六牙の白象に乗った普賢菩薩が線刻されたもので裏面に天正十七年(1589)の銘などが見られる。

雲版一面



県指定重要文化財 雲版一面

- 1、指定年月日 昭和51年5月7日
- 1、所在地 前橋市元総社町1-31-45
- 1、所有者 (宗) 総社神社

【概要】

雲版は、寺院で使用された仏具である。輪郭がいくつかの弧線によって区切られており、その形が雲形をしているところからこの名が付けられた。板状の銅または鉄製の鑄造物で、上部の突起に孔があり、庫裡に吊り下げて起床、座禅、食事などの合図に打ち鳴らされた。

総社神社には古来からの宝物が数多くあるが、この雲版は大正年間に境内の杉の老木の根元より発見されたものである。銅製で片面だけに二重の縁取りなどの造りが施されている。銘文はないが、全体の形から察しておよそ鎌倉時代後期の作と推定される。

<http://www.net-you.com/souia/index2.html>

<http://blogs.yahoo.co.jp/kanezane2/15986475.html>

<http://blog.goo.ne.jp/nara05m037/e/ee4e5d8547d198b3d229a8990480afa9>

<http://joe.ifdef.jp/006gunma/056oumi/oumi.html>



総社古墳群と山王廃寺 地図

CLOSE X

